

道具の身体性から見た竹箴の復興に関する一考察

—道具の復権を求めたアクション・リサーチから—

鳥居 史絵・山口 洋典

あらまし

本論文は、政策、施策の段階的、断続的な展開だけでは伝統産業の活性化に限界があることを示しつつ、生産のための道具への関心が、多様な主体が協働する端緒となることを明らかにしたものである。特に、手織りによるはた織り機の部品の一つである箴（おさ）について取り上げ、中でも竹製の箴を織り手が用いることが手織り産業全般の活性化に寄与するのではないかと、という問いにアクション・リサーチの手法により接近した。大量生産－大量消費の時代、最早手織り産業は最盛期と比べてみれば大幅に衰退した。しかし、とりわけ伝統産業に対しては、技術の保存、技術者の保持、産業の保護を行うだけでは、産業の維持・発展を導くことはできないことを、生産に用いる道具に関心を向け、実践と論考を重ねたのが本稿である。特に、手織り産業において竹箴は、織り手の身体を延長するものとして位置づけられるとの観点から、身体化された道具の復権こそが、産業の維持・発展、転じて復興を導くのではないかと、という点に接近した。

1. 研究の背景・目的・方法

1.1 モノの値段と手仕事

「たかがハンドル一つなんだけど、これがくせ者でな……。」冒頭から私事で恐縮だが、これは第二筆者の父のことばである。父は輸送機械メーカーのサラリーマンとして高度経済成長期に生き、定年退職後も協力会社から声を掛け

ていただき、今なお、輸送機械関連のメーカーで働き続けている。冒頭のことばは、大学進学以降、生まれ育ったまちを離れていた私（第二筆者）が帰省し、家族で初詣に向かっていたときに渋滞のなかで語った話の一節である。

このハンドルとは、トヨタ2000GTという自動車の純正ハンドルのことであった。上述の輸送機械メーカーとはヤマハ発動機株式会社であり、わずか327台にとどまった稀代の名車を生産したことでも知られている。入社して程なく生産のプロジェクトに携わり、現在に至るまでオーナーズクラブ等との関わりを持ってきたという。経年変化に伴う劣化に対応するためにガレージに部品を約1台分保有しているオーナーなど、同車に愛着を持つ方との親交を深める中、生産打ち切りから約20年が経過した1988年頃、「ハンドルを修理しながら使っているが、純正の木目がきれいで、フィーリングも忘れられないから、なんとかならないか」との声が強く出て、再生産の検討がなされることになったという。

トヨタ2000GTのハンドルは、薄く切ったマホガニーという木材を輪の形に曲げた上で積層接着して合板に仕上げ、さらにグリップ部を職人が魂と愛情を込めて仕上げたものである。当時製作に当たった会社は既に廃業していたものの、ピアノ製造の木工技術で世界一とされているヤマハ株式会社の紹介を受け、「今回限り」という条件つきながら、20本の再製作が叶った。結果として納期は3ヶ月、一本当たりの単価は20万円程に及んだというが、オーナーからは大変な感謝が寄せられたそうだ。冒頭のことばは、この一連の流れの一節であり、ハンドルを握りながら楽しそうに語っていたことをよく覚えている。

既に「手仕事の時代は終わったのだ」(塩野, 2008, 291ページ)という指摘もある。これは、1990年代に各地の手仕事に生きる職人を訪れ、その仕事ぶりや職業的倫理観をまとめた塩野(2008)の著書の本文中の最後を飾る言葉である。塩野は、職人たちの生き様を取材し、自然との折り合いを付けながら、厳しい消費者の目にさらされてきたことに対し、一定の評価を与えている。しかし、大量生産-大量消費の風潮は、最早時代の流れとして受け入れざるを得ないとしている。そのため、冒頭に述べた通り、手仕事の職人たちが息づく生活スタイルは終焉を迎えたと述べている。

たしかに、大量生産のシステムの恩恵により、消費者は安価でモノを手に入るようになった。何より、大量生産が可能となった要因には、消費者が大量消費を求めているという前提がある。このように、大量生産-大量消費のシステムは、コインの裏と表のごとく、どちらかを成り立たすためには必ずもう一方の存在も必然とされた。加えて、大量消費を成り立たせる仕掛けとして、製品の粗悪化を是とする風潮も認められるようになった。使い捨て文化がその象徴である。つまり、使えるならば多少は粗雑であってもいい、使えなくなったら新しいものを買えばいい、という具合に、安く、早く、しかし低品質で耐久性のない粗悪品が大量に世に出されることとなった。

一方、天然木のハンドルをピアノ製造に協力する木工業者の熟練職人が製作し、それが一本数十万円の値段で販売されることを消費者が大歓迎をしたという事実からは、消費者が所有と使用の両面に価値の妥当性を見出すとき、その製作に至る手仕事に対して絶対的な畏敬が寄せられているのではないかと捉えることができる。ちょうど、英語のworkという語が仕事という行為と作品という結果の両義を有すように、手仕事という行為とその結果とが、適切に評価されたことによるのだろう。さらにこのハンドルの例について言えば、仕事と作品の関係、つまり行為と結果の関係のみならず、ハンドルが自動車を操縦する道具、より精確には車輪を操

作する道具であることにも注目する余地がある。なぜなら、いくら強度に優れ、美しい造形を持ったとしても、ハンドルはハンドル単体では用をなさないためであり、ハンドルを握って自動車を運転するという行為において使えるか否か(つまり、可能か不可能か)ではなく、使いたいかな否か(つまり、使い勝手や使い心地が良いか悪いか)によって、消費者がモノを選んでいくのだ。

ゆえに、消費の基準が購入時の値段によって判断されるのは、必要ではあるが十分ではない。ところが、不要ではないはずの手仕事に従事する職人は、大量生産-大量消費のシステムのなかで不用とされてしまってきた。そこには、塩野(2008)の言う「目の肥えた消費者」が、手仕事によって生み出されるモノを、生産の道具として用いていないという点にあると考えられる。なぜなら、職人による手作りの道具がまだ身近にあった時代は、「安いからといって、どうでもいいものを使うことは効率を悪くすることであり、結局は損につながった」(塩野, 2008, 250-251ページ)のために、道具の使い手の立場も、自分の能力が最も発揮しやすい物を求めているのだ。すなわち、人々は何を所有するかを選択する際に、入手したものをどう使用するか、あるいは自らがどこまで活用していくか、それらの意味を同定していたのである²。

とはいえ、「よい」とされる道具は概ね高額であり、入手の経路や購入資格も限られていることが多い。これも一因となって、安価で量産されている代用品によって、伝統的な作業が済まされてしまうこともある。もちろん、場合によっては「プリコラーージュ」といったことばで表現されるように、手近にあるありあわせの道具を使うことによって、ある目的を達成することもあろう。しかし、持ち合わせの道具を創意工夫で使いこなす「あり合わせ」と、単にその場しのぎで目の前にあるものの「間に合わせ」が決定的に異なることに着目するならば、使い勝手の悪い道具を用いて出来上がりの質が劣るもので満足する状況が常態化すると、消費者は質の劣化に疑問を抱かなくなるのではないかと

¹ 大量生産-大量消費時代が到来して久しい現在、無論、安価な製品であるから悪いと言いたいわけではない。安価であることは消費行動を左右する一要素であることは論を待たない。例えば、いわゆる「100均」(店内の商品が100円均一である店舗)には、外国人観光客の観光スポットになっているともいう。こうした消費行動の是非論を、本稿では取り扱わないことを明記しておく。

² 例えば名工が「選び抜く」であるとか、職人が「使い切る」、現場で「使い倒す」といった表現に、所有と使用の相即を見ることがができる。これらの表現と身体性との連関については、別稿に改めて検討することとした。

と考えられる。

少なくとも、経済合理主義、市場至上主義が浸透することで、生産のための道具が淘汰されてきている。その一つが、鳥居（2008, 2009）が扱っている竹箴³である。竹箴とは、竹製の箴⁴と呼ばれるはた織り機の部品の一つであり、その日本国内での生産は2002年に幕が下ろされた。しかし、手織産業のシステムから阻害⁴された竹箴ではあったが、現役の織り手から生産の再開を願う声が上がリ、2003年7月に「日本竹箴技術保存研究会」（略称：竹箴研究会）が設立されている⁵。

言うまでもなく、自身の能力を十分に発揮するには優れた道具を使用するに越した事はない。縄文時代の火炎土器に人々の創る喜びを見出した出川（1997）は、その著書の中で道具が悪いがために創る喜びが損なわれるならば、その影響が作品自体にも現れることを明快に示している。特に「人々は土を練り、木を削り、布を染めることによって、自らの中に本来の人間性が戻ってくることを感じる」のであり、「その行為の中に、各々のささやかだがたしかかなルネッサンス（人間復興）がすすんでゆくのを感ずるだろう」という部分に、その主張は集約されている（出川, 1997, 451ページ）この指摘からも明らかなように、道具を自身の身体の延長として使用することが求められる細密な作業であれば尚更のことだ。

ここまで、本節では唐突に自動車のハンドルの再生産にまつわるエピソードを示すなかで、モノの生産と所有と使用の関係について論考を重ねてきた。続いて、特に身体性という観点から、モノの中でも専ら生産のために用いられる道具に対して関心を向け、生産者と消費者の選択眼について着目した。そして、第一筆者が長期間にわたって展開しているアクション・リサーチでの研究対象の一つである竹箴を取り上

げ、産業システムというマクロな視点にまで議論を拡張させた。そこで次節では、本節で触れてきたことばに対する定義を明確にしつつ、本稿の目的や構成を整理することとした。

1.2 身体の延長としての道具の復権を求めて

本論文は、道具における身体性という観点から、手織によるはた織り機の部品の一つである箴について取り上げるものである。特に竹製の箴（すなわち、竹箴）が手織り産業の現場に復活するために活動していることの意味と今後の展望を述べる。その際、産業システム全般にわたる道具の復権に着目する。具体的にはアクション・リサーチのエスノグラフィーをもとに、生産のための道具への関心が、多様な主体が協働する端緒となることに着目していく。

前節でも触れたとおり、大量生産－大量消費の時代、最早手織り産業は最盛期と比べてみれば大幅に衰退している。もちろん、手織り産業だけが、大量生産－大量消費の時代の影響を受けているわけではなく、いわゆる伝統産業と呼ばれる分野においては、専門的な道具の不足から製作に困難を極めているものも散見される状況にある。事実、京都府は平成18年度及び19年度の2年間にわたって伝統産業事業者及び道具類の取扱店と道具職人に対してヒアリング形式による調査が展開されており、「道具類等に係わる研究事業報告書」がとりまとめられている⁶。本稿に関連する、染織の専門誌『月刊 そめとお』の693号では、この調査に対し、「伝統産業に使用される道具類の需要低迷・職人の高齢化などの現状」に即したものとして一定の評価を与えている（32ページ）。

地方自治体はもとより、国としても、伝統産

³ 第3章第1節第1項にて詳述する。

⁴ 竹箴生産の衰退は、明治期における西欧の機械織機の伝来と同時に導入された金属製の箴、すなわち金箴普及の影響による。金箴は竹箴に比べて安価で耐久性があるとされ、機械織はもとより、手織の現場にも普及した。これらの歴史的経過については鳥居（2008）ならびに穂積町（1979）を参照されたい。

⁵ ここで確認しておきたいのは、竹箴研究会も、さらには第一筆者も、金箴と竹箴の絶対的な優劣関係を主張しているわけではない、ということである。向き不向きや織り手の趣向が蔑ろにされるかの如く、一様に金箴が普及したことを憂慮しているのである。

⁶ 伝統産業事業者には実際に使用する道具類、原材料などの単価、耐用年数、年間使用量、入手困難な道具類、入手先の状況、代替品の有無などが調査されている。また、道具類の取扱店と道具職人には、後継者の有無、取扱店の種類、同業者の有無、仕入先、納入先の状況、入手困難な道具類と原材料等の状況、代替品の有無、他分野の道具類の製造・転用の可能性などが調査されている。結果として、道具類・原材料等の供給安定化その他を図るネットワークの構築が提案された。

業に対しては保護措置が積極的に講じられている。鳥居（2008）でも、芸術文化振興基金による補助金交付について取り上げたところである。言うまでもなく、国による補助金はもとより各種団体からの支援を受けることなく、生産者と消費者との適切な関係構築を通じて産業が維持・発展が導かれることが理想的ではある。しかし、現実には、技術の保存、技術者の保持、産業としての保護の措置が継続的になされなければならない状況にある。

そこで、手織り産業において竹箴が、織り手の身体を延長するものとして位置づけられるとの観点から、身体化された道具の復権こそが、産業の維持・発展、転じて復興を導くのではないかと、という点に接近していくのが本稿である。ここで二名による執筆の分担について触れておこう。そもそも、繰り返し述べているように、本稿は第一筆者によるアクション・リサーチを、第二筆者との共同執筆によってとりまとめたものだ。具体的な役割分担を示しておく、第一筆者のエスノグラフィーを第二筆者との意見交換を通じて第一筆者の修士論文（鳥居, 2009）をもとに第一筆者が草稿をまとめ、特に第1章、第3章、第4章を中心に第二筆者が推敲を重ねたものである。

本稿は、2003年11月から2009年1月にかけて行われてきた第一筆者のアクション・リサーチの中でも、第二筆者との協働で行われた2008年4月以降の鹿児島県奄美大島における滞在型のフィールドワークからの知見によるものである。既に第一筆者による2003年11月から2008年3月までの竹箴研究会での実践的研究のエスノグラフィーは鳥居（2008）に示されているが、本稿では次章において、2008年3月より京都から奄美大島に移住し、「竹箴研究会の鳥居」が織りの産地といかに関わったのかの軌跡が記されたエスノグラフィーを示すこととなる。具体的には、本場奄美大島紬技術専門学院の伝習生となることで竹箴の使い手としての視点を養いながら、同時に織り手の竹箴への思いに接近したものだ。なお、その間、2008年9月には第二筆者と共に現地においてヒアリングやフォーカスグループインタビューが行われ、さらには両筆者によって2008年12月には竹箴研究会の例会にて、奄美大島における竹箴の置かれた状況について報告がなされている。

そもそも本稿の執筆にあたっては、同志社大学大学院総合政策科学研究科ソーシャル・イノベーション研究コースの定める枠組みに基づき、実践的研究を展開してきた。それは山口（2007）が述べているとおり、「問題を発見し、それらを当事者に提起し、具体的な対処方法を検討し、解決がなされたという状態に浸るまで実践的研究を展開する」というものである。杉万（2006）のことばを借りるならば、研究者と実践家が共通のフィールドで取り組む「ローカルな協働の実践」であった。そこで本稿では奄美大島と竹箴研究会という2つのローカルな現場を横断しつつ、それらのフィールドでの協働の実践の成果を次のようにまとめていくこととする。

以下が本稿の構成である。まず、本章、第1章では研究の背景と目的をまとめたが、第2章では、大島紬産業の産地において竹箴が置かれた状況について示す。続いて、第3章で道具における身体性の観点から竹箴と手織り産業全体の関係について論考を重ねる。そして第4章では、産業界における生産現場において道具の復権という視点を持つことにより、復権の連鎖反応が生じ、他の道具の復権も呼び起こす可能性を提唱することを通じて、道具の復権こそが産業の維持・発展、転じて復興を導くのではないかと、という点を明らかにしていきたい。

なお、具体的な事例を取り扱う前に、道具ということばの定義について確認しておこう。まず、道具とはモノ（物体）の中でも特別な性質を帯びた物体であることに着目していただきたい。事実、第二筆者の助言により第一筆者も入会した「道具学会」の研究叢書には、『『モノが道具化する』ということは、その扱い方に文化的制限が生じることを指す』（朝岡, 2007, 6-7ページ）とあるように、モノは道具に成り得るものであり、そしてその道具としての役割は、その使用者が浸っている文化に依存するものとされている。例えば木の棒は、歴史的に見てみるならば、食料を得るための狩りの武器になったときもあれば、たいまつを灯す芯になったときもあれば、棒を加工して箸として食べ物を口に運ぶものとなったときもある。ここで注意すべきは、箸は、箸を使用する文化圏の人であれば、細く短く加工された2本1組の木の棒を、自らの手の延長として食べ物を口に運ぶ道具と

みなすだろうが、箸を使わない、あるいは知らない人にとっては、単なる2本の棒として認識される点である。

ある物体を目にしたとき、使用する際の行為が想起されることによって身体化された道具とみなされるか、現前する環境のなかでの単なる事物にすぎないものでしかないかは、その人物が前提としている習慣に依拠する⁷。この論拠としては、人間の身ぶりやしぐさが生活集団によって形成されると述べる野村（1996）の議論が参考になる。具体的には、「排泄のような直接的な生理的動作も身体の形態学的条件によっては決定づけられないという事実をみておくことは、人間の身体がふつうかんがえられているよりはるかに融通性に富むことを知るのに役立つだろう」（野村，1996，7ページ）という指摘である。この論考から言えることは、ある生活集団において形成された習慣が、道具の使用価値を決定するという点である。

よって、改めて本研究では道具を「全ての物体のうち何らかの使用目的が課せられていると感じる物体」と定義した。このように捉えてみれば、道具学会の森孝之が、「道具とは主体性を尊ぶ人間の、つまりオリジナルの代物やオリジナル性に富んだ人生を創出する人間にとって不可欠な身体の延長だと考えている」（道具学叢書委員会，2007，17ページ）と述べている点にも合点がいく。たしかに、机、額縁、スポーツを行う際のボールなどを引き合いに出せば、全ての道具が身体の延長としてみなすことできるとは言い難いが、身体の延長としての機能は、道具に対して求められる大切な要素であるためだ。このように捉えたとき、果たして竹箴は、身体の延長として位置づけられうるものなのか、さらにはどのような使用目的が課されているのかを考えていく上で、次章ではまずエスノグラフィーを示すことにしよう。

2 研究対象とエスノグラフィー

2.1 奄美大島と本場奄美大島紬

2.1.1 研究対象地の概況

鹿児島県の中でも南部の、鹿児島本土よりもむしろ沖縄に近い辺りに位置する奄美大島は、日本で2番目に大きな離島であり、周辺の島々である奄美諸島の中心を成している。この島の基幹産業の一つに大島紬がある。大島紬とは、締め機による緻密な緋模様作りや泥と車輪梅（テーチ木）による染めなどを特徴とする絹織物である。薩摩藩の奄美統治の時代、薩摩藩への献上品として生産されたことで、本土（内地）でも広まった。同じく課せられた「きび地獄」と呼ばれる黒砂糖の生産と共に、島人は字の通り、命を削って働いたのであった。黒砂糖はその原料であるサトウキビを口にすれば極刑が課せられ、絹織物である大島紬は1720年（享保5年）の薩摩藩による「絹布着用禁止令」により一部を除きその着用が禁じられた。

手工芸の域で制作されていた大島紬であったが、1879（明治11）年の泥染と車輪梅による染色法の統一、1890（明治23）年の針を使用しての緋合わせ技法の考案、1909（明治42）年の締め機による緋作りの一般公開、1915（大正4）年の本絹糸使用などの技術的進化を経て、現在の大島紬は形作られてきた。その緻密な緋文様と、泥染と車輪梅による特有の色は人気を博し、戦後の年間最高生産反数は1972（昭和47）年の28万反であり、年間最高生産高は1980（昭和55）年には286億円までにもなり、正に奄美大島の基幹産業であった。しかし、日本人の着物離れや他の要因も重なり、その生産量は徐々に減り、平成19年には2万反を割るまでとなった。大島紬産業の盛んな頃は奄美諸島の女性にも織工という形で高額の働き口を提供していたが、織り賃が減少してしまった近年では、時給が保証されている他の仕事に転向してしまっている人が大多数を占める。後継者の育成に関しては、1927年に発足した鹿児島県工業試験場大島分場を元につつま本場奄美大島紬技術指導センターで行われている。ただし織りの工程のみは1980年に発足した本場奄美大島紬技術専門学院で教え

⁷ この点は大澤（1990）の社会学的身体論が参考になる。社会学的身体論では、規範の形成について、物体でもあっても身体として認識されることが述べられているためである。その点に着目して、多方面にわたる分野で研究を進めている一人が杉万ら（2006）である。例えば、過疎地域活性化、医療・看護、養子縁組などの分野で、社会学的身体論を用いている。ただし、本稿では道具が身体化されうるものを確認するのみに止め、これ以降の議論を身体化されうる道具がいかに復権するかに焦点を当てる。よって、身体論そのものにはこれ以上立ち入らない。

ている。毎年島の内外からの志願者が技術の修得に励んでいる。奄美諸島における大島紬に関しては、大島紬の歴史、生産、流通を記した金原（1985）、染織の歴史と大島紬の韓国流出問題を記した茂野（1973）、女性の仕事として息づいていた織りを記した長田（1978）、大島紬に関わる職人たちの努力の軌跡を記した重村（2007）、また人々の暮らしとの関わりを記した『名瀬市誌』など各市町村の史誌、そして本場奄美大島紬協同組合による記録などに詳しい。

2.1.2 研究対象地における研究対象の概況

第一筆者は2008年4月より奄美大島に移住した。そこで見聴きしたことから、本節では島人と大島紬の関わり方を述べたい。現在は産業として衰退していると見なされているが、それでも大島紬がいかに島の経済や暮らしに影響を与えていたかは、島内の橋の欄干や外灯や道路のタイル模様など、あちらこちらに大島紬をモチーフにしたレリーフが見られることから伺い知ることができる。また、現在の60歳以上の女性であれば、大多数の方がはた織りの経験があると聞く。そのため、島の小学生に「大島紬作ってるとこ見たことある？」と聞くと、少なくともクラス⁸に2、3人の割合で「ばあちゃんが織ってる。」や「ばあちゃんが昔織ってたの見た。」という答えが返ってきた。そして30代以上の男性であると、「小さい頃は母親のはた織り機はイタズラするためのものだった。」という応えが笑顔と共に返ってくるのであった。そのため、大島紬産業に関わって来なかった人たちであっても、大島紬に関して、詳しくは知らないが見た事はある、という認識は現在でも残っている。おそらく、今から100年ほど前の日本であれば、はた織りは母親の仕事として全国的に見られた光景であろう。奄美大島では、それが20年程前まで残っていたのだ。本場奄美大島紬協同組合理事長である田川盛二は「織工という仕事が確立されていた頃は、女性が自宅に居ながら収入を得る事ができていました。それが今ではパート等で家を空けざるを得ないんですね。子どもの姿をいつも大人が見てやれている社会でしたの。」とお話しくださった。

決して女性を家にしぼりつけようとしているのではなく、良い意味で社会に目がいきとどいていた環境であったとのことである。

島人にとっていかに大島紬が身近なものであるかも、容易に伺い知ることができる。まず、大島紬のような紬の織物は、一般的には普段着とみなされるため、晴れの場に着用することはふさわしくないとされている。しかし奄美諸島においては、大島紬の着用は目的に合わせた着こなしさえできていれば、葬式を除いて基本的にはどのような場にも着ていくことができる。そうであるといっても、近年はスーツを着用する人の割合も増えているとのことである。それでも、島全体で大島紬はフォーマル着としてもみなしているのだ。また、積極的に大島紬を日常の中に取り入れようとする気運も見られる。家庭で大島紬のハギレで作られた小物が利用されていることはもちろんのこと、ある業者のバスガイドは自ら制服に大島紬を取り入れたという話も聞いた。奄美大島らしさを出すために自腹を切ってまでベストを新調したという。また、ある飲み屋の「ママさん」は、自ら作った大島紬のハギレを使ったコースターを、来店客にお土産として渡しているという。「とくに島の外からのお客さんは喜んでくれます。」と話した。島内で生産されたものを誇り、積極的に使用しようとする気質がうかがえる。しかし、その一方で若者にはあまり興味を持たれていない傾向にあることも事実である。奄美大島出身の20代の男性と女性に話を聞いたところ、「紬はただ高価なものというイメージしかなかった。」とのことであった。最早、七五三や成人式という比較的着物が推奨される行事で着ないかぎり、袖を通す機会も無いという。現在、大島紬は過渡期を迎えている。

2.2 大島紬との出会い（2004.2～）

第一筆者と奄美との出会いは、2005年2月、大学2回生の時代に遡る。ちょうど、定期試験を終え、所属していた研究会の一環で、奄美大島の南に位置する徳之島を6日間の調査旅行の名目で訪れたのが縁の始まりだ。飛行機から降り立った瞬間に感じた、亜熱帯の強烈な日差し

⁸ 1クラス30～35人ほど

が印象的であった。調査には指導教授と懇意にしていた徳之島の民俗学者でおられた松山光秀氏（故人）⁹の案内で行われた。最初に島内を観光した後、2日目からは4つの班に分かれて徳之島町の母間集落内の4つの地域をそれぞれ訪問した。第一筆者の班では、自宅で大島紬のはた織りをして暮らすおばあさんに伝承や生業の話をついた。他の班では島の主要産業である黒糖作りや、あるいは夜光貝細工の話をついた。

「京都から来た女子大生」である第一筆者らは厚い歓迎を受けた。居間でお茶と黒糖をいただきますながら伝承、通過儀礼、冠婚葬祭、そしてはた織りの話を聞いた。今まで織って来た大島紬のハギレを見せていただきながら、苦労話や生い立ちについての話がはずんだ。泥染特有の黒を地にした30cmほどのハギレを見た時、一番印象的だったことは緻密な縦模様であった。しかし織物自体は、黒っぽい地によく見た柄、といった印象で特に感銘は受けなかった¹⁰。むしろ、はた織りという自宅に居ながら自分のペースで進めることができる職業をこの亜熱帯のゆったりとした土地柄で生業にして暮らすことにひどく魅力を感じた。自身もはた織りを職にしたいと思うには充分の衝撃であった。

その後、2006年9月、2007年7月と計3度に渡って徳之島を訪れ、ひたすら織工のおばあさん方から話を聞いた。同時に自身も大島紬を織る環境を探した。徳之島で最後まで残っていた織工の養成所は、訪れた前年度までで新規受け入れは停止されていたことが分かった。思い入れのある徳之島ではた織りを習うことを願っていたが、それは叶わなかった。奄美大島本島であればまだ養成所が残っていると伺い、2007年3月に1週間ほどの日程で奄美大島に養成所を見て回る目的で訪れた。

大阪港から船で30時間ほどを経て奄美大島の地に降りた。奄美大島に知り合いは居らず、インターネットを手がかりにして得られた情報が全てであった。真っ先に向かったのが本場奄美

大島紬協同組合であり、職員の方に資料室と織りの学校である本場奄美大島紬技術専門学院（以下：紬学院）を案内していただいた。島外からの者でも習うことができる場所が存在していることに安堵した。4日目からは島の北部の笠利町（現：奄美市）に移動し、当初の帰宅予定も延長し、さらに3日ほど滞在した。ただの観光客である第一筆者らに対して、島の方はこの上ないほどに親切であった¹¹。出会う方々から向けられた笑顔のおかげで、見知らぬ土地の一人旅でも不安は感じなかった。それどころか、すっかり奄美大島の豊かさに魅了され、「また戻って来ます」とお世話になった方々に約束し、帰路についた。

2.3 社会実験としての移住・居住型フィールドワーク（2008.4～）

2008年3月27日に大阪港を出航したフェリーは、途中中身入り2Lサイズのペットボトルが卒倒する程の波に揺られながらも、33時間の航海を経て奄美大島に到着した。再び島を訪れる願いが叶ったことに深い喜びを感じていた。これから、念願の奄美大島ではた織りの修行が始まるのである。

紬学院が開校するより一足早く、大学院の授業は開講した。4月9日には初めて奄美大島で大学院の授業を受けた。インターネット回線を利用したテレビ電話¹²を介してのものであった。授業がまるで目の前で繰り返されているかのように問題無く受けることができた。多大な負担をおかけするにもかかわらず、大学の校舎を離れて授業を受けるという行為を認めていただいたことに深く感謝している。以後、春学期は毎週水曜日に授業を受け、秋学期は進度に応じて授業が開かれた。

入校式¹³は同月11日に行われた。週が明けた最初の授業の日のおやつの時間に、学院生同士

⁹ 1931年生まれ。コーラル文化論を提唱。その著書に『徳之島の民俗（1）シマのこころ』、『徳之島の民俗（2）コーラルの海のめぐみ』（ニュー・フォークロア双書、2004）などがある。2008年没。

¹⁰ 薄暗い室内で洋服でも見かける柄であったため特に感銘も受けなかったが、後に、明るい場所（特に亜熱帯の強烈な日差しの中）で見た茶褐色のかかった黒色や大島紬の伝統柄は十分に美しいと感じさせられるものであった。

¹¹ 例えば、素泊まりのはずの宿では管理人の「おばちゃん」が魚のフライを用意しておいてくださり、ある観光施設の職員さんは車で送り届けてくださり、また他の観光施設で知り合った現役の織工である「おばあちゃん」は翌日自宅に招いてくださった。

¹² 正確には、VoIP技術を用いたSkypeによる通信であったが、研究サポーター等の理解を容易にするため、ここではテレビ電話と記す。

¹³ 2008年度新入生は6名（内、奄美大島出身1名）。4月の時点で学生は22名であった。

の自己紹介の場が設けられた。そこで、第一筆者がまだ大学院生の身であることを明かすことに少々ためらいを感じた。「研究をしに来ている」という理由から身構えられてしまうことで、話の内容が減ってしまうことを恐れたためだ。しかし、今隠したところですぐに大学院生であることを明かす必要が生じるであろうことや、とりあえず竹箴研究会の名を広めたいと思ったため、正直に研究も目的で来島している旨を伝えた。今思うと、正しい判断であったという確信がある。

はた織りの研修は特に座学で事前学習が行われることもなく、最初から指定されたはたと糸が割り当てられて実技が始まった。図1に示すのが現場の様子である。糸をはたにかける作業等で3日かかり、4日目からは織りの作業を行い出した。

はた織りに関して完全な初心者であった第一筆者は、人一倍作業が遅かった。当初、一日に織り進められる長さは10cm前後であり、時にはマイナスを記録することもあった程であったが、徐々に20cm、30cm、40cmと伸びていった。なかなか織り進められない第一筆者たち一年生に対して、織りの先生は「よおり よおり ばたつくな」という言葉をくださった。「ゆっくり ゆっくり あわてない」という島言葉である。6月25日のことであった。おそらく、歴代

の織工見習いにもかけられたであろう言葉を自分ももらったことに対して、仲間に入れてもらっている感覚を味わった。

織工経験者をまったく苦勞することなく探することができる環境の中で、「金箴と竹箴は使っていて違いがありますか?」と尋ねると、決まって挙げられる項目が、「糸通しのしやすさから竹箴の方が良い」、という答えであった。大島紬はその特徴の一つに泥染めがある。泥染めにより染められた糸は黒色に近いので、金属製で黒光りする金箴よりも、竹の質感そのままである竹箴の方が糸を見易いとのことであった。そのため、金箴しか手に入らなくなると、糸通しを行う際には金箴の表面に白いチョークを塗って糸を見易くしたとのことである。

さらに、単に黒い糸には明るい色の箴の方が糸通ししやすい、という色の問題だけではなく、竹箴の自然素材特有の不揃い感が箴目を見易くしているという。「オサバ¹⁴の…何て言うの?櫛の歯の部分。あそこが1枚1枚見え方が違うでしょ。だから何となく次の穴を覚えてて、だからスイスイ作業ができるの。金箴だと全部一緒だから…」とのことであった。糸通しの作業は、織り始めの、糸をはたにかける作業の際だけに行うことではない。織りの最中でも、何らかの原因で経糸が切れることはあるのだ。そのため糸通しのしやすさという観点は、規定の長さで



図1 紬学院風景 (2008年5月22日、第一筆者撮影)

¹⁴ 第一筆者が耳にした限り、奄美群島では箴のことをオサバと呼んでいる。

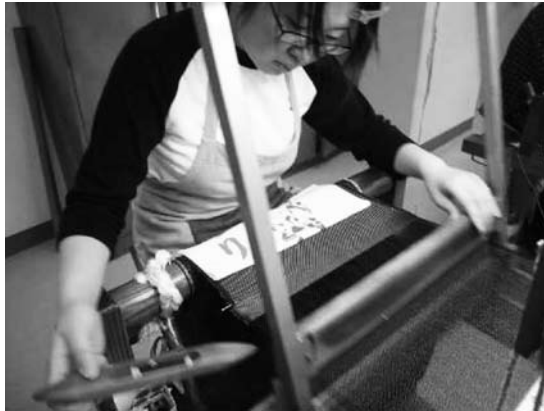


図2 はた織りをする第一筆者

ある約25m（一疋分）を織り上げるまで常につきまとう。「だから竹か金か、って重要よ。」と言われた。

また、糸通しのしやすさは、単に見た目の問題だけではない。ここでも、竹箴の持つ、しなる性質が好まれている。「竹箴だとしなってくれるから安心して糸通しすることができるよ。金だとちょっと変に力入れちゃうと、曲がってそのまま直せないからね。」という。「糸の見やすさから言えば竹箴の方が良いけど、他は別にどっちでも良いよ。」という意見もあった。織り心地はどちらの箴でもさほど気にならないという。箴の素材の性質としては、竹箴の方が良いという方と、どちらでも問題ないという方と居た。箴の性質に関する意見として、「金箴はガラガラして糸を切りそうで怖い」、「絹糸に当てるのだから、天然素材の竹箴の方がなんとなく良い」、「竹箴の方が打ち込みの際の音が優しいから良い」、「竹箴の音なら気持ちよく作業できるんです。だからリズムよく効率よく織ることができるの。」という竹箴を好む意見が聞かれた。

また一方で、「竹箴はすぐ（箴羽が）毛羽立つから金箴の方が良い」という意見も一名から聞かれた。逆に、竹箴の箴羽の痛みくらいならすぐに修理できるが、金箴では修理ができないから竹箴が良い、という意見も聞かれた。そして、値段に関する意見は一度も耳にしなかった。これは奄美の方の気質からきているのかは定かではない。織工のはた織り道具は、用意が出来る者は自分で用意し、用意のできない者は親方と呼ばれる織工の雇い手が用意して織工に貸す

こともある。値段に関する意見が聞かれなかったのは、この制度も一因であるかもしれない。おおむね竹箴の方が使い易い、という意見を得ながらも、織工は竹箴が無いならば仕方が無い、という受け身の状態であることが分かった。だからであろうか、まだ現役で竹箴を使うことが出来ている織工は、竹箴で織っていることを誇らしげに話すのであった。「今もう売ってないのよー貴重なんだから。大事に使ってるよー。」と笑顔とともに話してくれた。この方だけではない。「竹箴でなくちゃ使うの嫌よ。お蚕さんに失礼だわ。」とまで言われた時には驚くと同時に、その方の織工という仕事への誇りを感じた。

このような織工の意識が分かり出した頃から、第一筆者は何とか織工に竹箴研究会の存在を知らせる手は無いかという気持ちが強まり出した。「竹箴使いたいけどね～今お店で売ってないのよ。」という織工からの残念そうな声を聞くたびに、第一筆者は「今、岐阜県で一生懸命作ってるんですよ！」と竹箴研究会の存在を伝えてきた。そして「あげーほんとー。楽しみだわー。いつ頃できるの？」という笑顔を見るたびに、もどかしさを感じた。竹箴は奄美大島でも必要とされているとまず断言できるだろう、でももっと多くの人の意見を聞きたい、そして竹箴研究会の活動を島の人に知ってもらいたい、という思いが日増しに強くなっていった。その打開策として、当初、竹箴研究会のパンフレットを組合や親方を通じて配布しようかとも考えた。しかし、それでは第一筆者がその人からの意見を聞くことができない。そこで第二筆者とのあいだで第一筆者が毎週行っていたり

サーチ・ミーティングの際に論点に掲げたところ、写真展を開けば竹箴研究会のアピールもできるし来場者から意見を得ることもできるという着想を得た。第一筆者は早速写真展を開くべく準備を始めた。

2.4 写真展の企画実施を通じたもう一つのヒアリング (2008.7～)

写真展の開催にあたり、まずは企画書の作成から始めた。趣旨や規模を盛り込んだものを担当の職員に提示し、組合一室をお借りできるか打診した。検討の結果、組合一室を無料で貸していただけることとなった。これは破格の待遇であったという話を後ほど耳にした。大島紬に関係のある道具がテーマであったため、配慮をいただくことができたのであろう。しかも、貸していただいた場所は資料室であった。「大島紬に関する資料と併せて見てもらった方が来場者に理解してもらいやすいんじゃない?」と担当の職員は話してくださった。開催に当って、本場奄美大島紬技術指導センター(以下:指導センター)の福山氏へ協力を仰いだ。福山氏は、奄美大島で唯一の竹箴研究会会員である。福山氏の存在は、下村会長から大島紬の現場での竹箴に関する情報を一手に送ってくださっている方だと伺っていた。写真展開催の提

案に対して福山氏は全面的な協力の意を示してくださった。特に、所詮は島に来てまだ3ヶ月の第一筆者が最も不安に思っていた広報活動をほぼ一手に担ってくださったのだ。ポスターやチラシといった印刷物の協力から、新聞やラジオ等メディアへの働きかけも行ってくださった。全てその日のうちに、である。奄美ののんびりした雰囲気の中での出来事であったため、第一筆者はひどく驚いてしまったことを記憶している。

本写真展はソーシャル・イノベーション研究コースにおける社会実験の役割も同時に果たした。本展期間中またはその後に人々から得られた竹箴もしくは竹箴研究会への反応の内容を見て、人々にどのような影響を与えたか、という観点から本実験を評価したい。

写真展は7月22、23、24、25、28、29日の6日間に渡って開催した。展示の内容は竹箴研究会の研修風景の写真17点、竹箴と竹箴研究会の説明パネル、竹箴の原料の現物を展示し、産地である祖父江で作られた竹箴作りの様子の映像を流した。展示の際に使用する机や椅子や展示パネルも組合からお借りすることができた。そして、会場内の緑は第一筆者の後見人であるYさんが、花は紬学院の同級生が、それぞれ自発的に持って来てくださった。第一筆者は植物を置くといった会場内の環境整備に関してまったく考えが至っていなかったため、それを見越し



図3 写真展の展示風景 (2008年7月22日、第一筆者撮影)

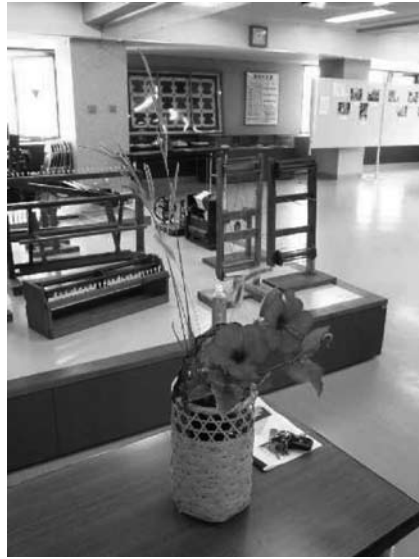


図4 紬学院の同級生が提供してくれたハイビスカス（2008年7月22日、第一筆者撮影）

での心遣いにただただ感謝の意を表すことしかできなかった。

福山氏のお力添えのおかげで、写真展は何度もメディアに扱われた。新聞は2紙に3回、ラジオでは開催の知らせを期間中毎日流していただいた。そのおかげで、開催期間中には102人の来場者を迎えることができた。「平日だけの開催でこの数字は万々歳だ」とは福山氏の言葉である。来場者は、紬従事者が大半であったが、中には観光客や外国人の姿も見られた。しかし、第一筆者とは面識のない織工の姿が、期待よりも大幅に少なかったことが反省点である。織工に来てもらえる仕掛けは成せられなかった。

来場者の方の大半は、展示パネルだけでなく、17分あるビデオ映像までも最後まで見てくださった。来場者と第一筆者の会話の中からは、「私より少し年代が上の方々は皆されていたのに…身の回りに無いから途切れてしまった」、「やっぱり竹は良いね。絹糸を金属製のものを使って織りたくない」、「こりゃ1万(円)じゃ安いわ…」といった声が聞かれた。ここで、アンケート用紙に記入していただいた形で得た¹⁵感想を紹介しよう。

a: もう、金製に変わってまったく作製されていないと思っていましたし、まさか専門としてなされているとは知りませんでした。学

生としてオサバ購入時、知って居ましたら購入したでしょう。(60代、女性、織工)

b: ちょっと説明ボードの字のサイズが小さくて、もうちょっと大きかったら読みやすかった。ビデオ上映されていて、とても分かりやすかった。一般の人のためにも漢字にふりがながあるとありがたい(笑)(20代、女性、織工)

c: 使ってはいても、その制作工程等何も知らなかったの、今回それを知ることができてとても良かったです。(30代、女性、織工)

d: 竹箴は自然の素材ですので、糸通しをしやすいでしょうし、やはり保存し後継者育成にも力を入れてほしいと思う。今回、鳥居さんの写真展、ビデオを見させてもらい、とても良かったです。(50代、女性、紬販売士)

e: 工具一つに手を掛けていることを紹介してください、さらに織りにも手をかけないと思います。(50代、女性、織工)

f: 紬産地での開催はとてもよいことだと思った。金箴にはない竹箴の良さをもっと伝わる

¹⁵ 調査日は、aからdが7月22日、eとfが7月23日、gが7月24日、hとiが7月28日である。



図5 写真展の見学風景（2008年7月22日、第一筆者撮影）

と良いと思った。(30代、女性、織工)

g：紬に関する道具がこんなに色々あるのに、鳥の人は、ほとんどそれを知らない。私を含め…もう少し伝統の紬に関心を寄せるべきであり…マスコミももっと取り上げるべきである。説明する人間も内地の女の子だけでは、淋しいものがある…と。(60代、男性、非紬従事者)

h：竹箴の大切さ、重要さ、日本の伝統技術の低が残念に思います。(30代、男性、販売士)

i：全然知らない世界で、こんなに大変な技術がある事を知れて良かったです。この技術がなくなっていくのはほんとおしい気がします。(30代、女性、非紬従事者)

上記でいただいた感想を見るだけでも、写真展の開催が、直接はヒアリングとは銘打っていなかったものの、貴重なヒアリングの機会となったと認識できるだろう。その背景には、竹箴の製造過程を知ることで大島紬や道具を改めて見てみる機会が提供できたことによるのだろう。もちろん、竹箴を日常的に用いているか否かにかかわらず、鑑賞者が今後、日常的に使用している道具に、ふと、思いを馳せる機会が作

れたのならば、第一筆者はそれで充分である。また、上記のアンケートより、*b*の意見をいただいたことで展示パネルの文字のサイズを大きくし、手書きながらルビをふったものと取り替えた。そして*f*の意見から、「金箴VS竹箴」と題した金箴と竹箴の特徴を比較したパネルを制作した。会場内の展示物の配置や、生け花も含めて、毎日来場者によって進化していく展示会であった。

この写真展の3日後には大島紬の伝統工芸師会の方が竹箴をテーマにしたモニュメントを本場奄美大島紬協同組合の玄関に展示して下さった。見た瞬間に期待してしまっただが、「鳥居さんの竹箴の展示会に合わせてみた」と言われた時には涙が出そうなほど嬉しさがこみ上げた。このモニュメントについては、他の方からも話題を出された。「組合の玄関の展示、良いわね。伝統工芸師会の人たちが史絵さんの写真展を見て作ってくれただね。花が飾ってあるよりもよっぽど紬組合っぽくて良いわ」と、第一筆者の後見人の方から言われたのだった。

また、1週間以内にはさらに新聞社¹⁶からの取材とラジオ¹⁷への出演の依頼を受けた。そのためか、ある機料品店の主人からは「新聞に出てたね。内地の人ががんばってくれてるのに、鳥の人はのんびりしてて恥ずかしい。応援しますよ」という言葉を掛けていただいた。また

¹⁶ 『南海日日新聞』2008年8月6日掲載

¹⁷ 奄美ディ！FM 2008年8月6日放送

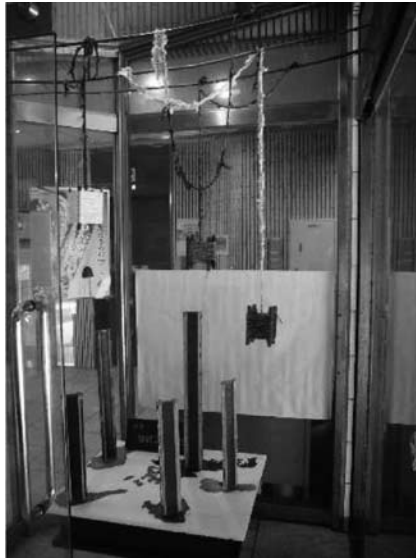


図6 写真展終了後に通常は生け花が展示されている場所に竹箴が展示された

写真展に来てくださった方と道で偶然再会した際には「がんばってるかあ？」と声を掛けていただき、お菓子まで持たせていただいたこともあった。紬学院の生徒からも、「私も竹箴使ってみたいわー」と声をかけられ、また違う学生からも「今ある竹箴って貴重なんだねえ」と感想をもらえた。竹箴の修理の件でも3件ほど問い合わせをいただいたのだが、全員修理費を聞かれると止めてしまわれた。制作側の要求と依頼側の許容範囲に著しくズレが生じていることが今後の課題であることも判明した。

そして、他の道具にも目が向けられた。紬学院で使用している糸繰り機は、その滑車の部分が自転車の車輪で作られている。糸繰り機を制作できる職人が消えてしまったために講じられた策であると聞いた。写真展を見に来てくださった紬学院の同級生の一人が、「ねえ、これ昔は竹で作られてたんでしょ？一つ気になると他も気になるー」とこぼした。身の回りの道具にこだわりを持って使用したいと思う気持ちの現れではないだろうか。竹箴に興味を持ってもらったことは、他の道具を考え直すきっかけも



図7 自転車の車輪が滑車部分に使われた糸車





図9 井上氏によるカマチへの穴あけ風景（2008年11月25日、第一筆者撮影）

た。これで中断していた帯織りの作業を再開していただくことができるのである。11月25日のことであった。

さっそく帯を織ってくださった岩崎先生によると、最初だけ糸が5本切れたものの、その時以外は切れたり毛羽立つこともなく、順調に織ることができる、とのことであった。その言葉に第一筆者は熱いものがこみ上げてくる思いであった。元はといえば素人集団が制作した竹箴であり、この竹箴を使用して織る事で、貴重な糸を傷つけてしまう可能性もあったのである。このリスクを説明した上で、岩崎先生は竹箴研究会の竹箴を使ってくくださったのであった。リ

スクとは、第3章第1節第4項の下村会長の発言が表しているように、大島紬用として整えられた糸が切れたり傷がついたりする可能性にさらすことである。

岩崎先生は素人集団が作った竹箴であることを理解していたにもかかわらず、自ら竹箴の試し織りを買って出てくださいだったのである。確かに、帯用の竹箴は目が粗く糸への摩擦も少ないため、糸が痛む危険性は少ないと言える。そして、もし仮に写真展の場に竹箴研究会で作られた大島紬用の竹箴が在ったとしても、リスクの高い大島紬用の竹箴ではなく、帯用の目が大きい竹箴での試織を言い出してくださいだったかもしれ



図10 カマチの改造によっておさまった8cmの竹箴（2008年11月25日、第一筆者撮影）

ない。また、単に興味の手芸のための道具として、手頃なものが目に入ったかもしれない。それでも、リスクを理解した上で試し織りを言い出てくださったのだ。このことは、竹箴研究会の立場から言えば、協力者を得たと言えるのではないだろうか。

一連の作業の結果、将来、奄美大島で竹箴研究会の竹箴を使ってもらうための障害とその解決策を発見することができた。今回の竹箴は奄美大島で求められているものと規格が違うため、今後他の障害も生じる可能性は予想に難くない。それでも、現時点で対処できることの一つは果たすことができたはずである。また、前項で述べた写真展を行った成果も得ることができた。写真展を行ったことで、竹箴研究会の取り組みについて一定の理解を得、さらには協力者をも得られたことは、写真展を行った成果としてこの上ないほどであると第一筆者は感じている。そして、この協力の内容により、今後できあがり期待される大島紬用の竹箴での試織を実行することに、一つの実績という形での円滑さをもたらしたのである。

筆者が奄美大島へ移住し、竹箴研究会の現場を離れている間にも、ゆっくりとではあるが、しかし着実に竹箴復活への体制は整えられていた。第一筆者は下村会長と電話やFAXでのやりとりを通して、これらの活動を知った。竹箴研究会の活動内容は下村会長が執筆する『染織情報 a』（染織と生活社）¹⁸のインフォメーション欄への執筆原稿を通して伝えられた。竹箴研究会のウェブサイト上でも活動状況を閲覧者に知ってもらうために、ウェブサイトへの掲載作業が第一筆者の役割であるからだ。

3. 考察

3.1 竹箴の復活とは何か

本章では、第2章で示した事例をもとに、道具が復権に至るまでに必要な要素を考察する。既に鳥居（2008）で示したとおりに、竹箴は竹箴研究会によって試作品が制作されている状況にある。そもそも、一度は生産量の低下から後継者もなくなり、新たな生産が停止された竹箴

ではあるが、再び生産に向けた準備が着実に進められているのだ。すなわち、金箴という代替品がありながらも、再度、その使い心地の良さから竹箴を必要とする者たちが、自らの手で市場に並べていこうとする取り組みがなされている。

竹箴復活の取り組みは、織の現場で使われる竹箴の完成を目指して、織り手に試し織りを依頼し、その完成度の具合を吟味している段階にある。ここで竹箴の復活とは、単に竹製の箴歯が枠に収まった物体が組み立てられることを意味していないことに注目したい。上述のとおり、織り手が実際に問題や違和感を抱くことなく使うことができるものに仕上がって始めて、竹箴は復活したと言えるのだ。つまり、実際に使われるか否かは、竹箴の制作者ではなく、使用者が決める問題であり、試作品が試作品として完成を迎えるには、実際の使用者による試織が必要とされる。

ここで重要なことは、このような竹箴の復活への取り組みには、芸術文化振興基金という公による保護措置が受けられているということである。要するに、竹箴研究会には公の立場から、日本竹箴技術保存研究会の名称が示す通り、竹箴制作のための技術保存、つまり竹箴の復活が求められているのだ。しかし、公の立場からの要請に応えるだけでは、竹箴研究会はその使命を果たすことができない。その使命とは、竹箴の使い手である織り手に対して恒常的に竹箴が供給される環境を創出するということだ。一度滅び、その存在が再び求められた竹箴には、技術が保存されることによって試作品が完成した段階においては復活したとは言えず、結果として竹箴が織の道具として用いられることのない状況を温存するに止まるのである。

3.2 試作品による道具の復活から道具の利用環境の復興へ

第2章で示した第一筆者の奄美大島での滞在型のフィールドワークでも明らかになったとおり、公の立場のみならず織の現場からも竹箴は復活が求められている。しかし前項で見たとおりに、例え竹箴が復活したとしても、使い手のもとに届かない状況であれば竹箴が復活したと

¹⁸『染織 a』は2007年8月号をもって廃刊し、2008年月号からは情報欄を中心とした『染織情報 a』がその後を引き継いだ。

位置づけることはできない。では、試作品が完成したとき、一体どのような環境が生み出されていけばいいのだろうか。逆説的に考えてみるならば、それは持続的に使い手のもとに届けることができる仕組み作りであろう。つまり、竹箴制作のための技術継承者の育成と、竹箴の流通体制の整備、また竹箴の存在と復活が周知される広報活動の展開が必要となるのだ。

事実、竹箴制作の技術保存のために、試作品の制作に力点を置いてきた竹箴研究会も、実際に使い手に竹箴が届けられるための販売活動を視野に入れ、多岐にわたる活動を展開している。例えば、使い手が望む竹箴の調査が設立当初から行われてきた。具体的には求められる竹箴の形や大きさ、使われる糸の種類、そして希望される購入価格などが調査されている。また、個々のほかに合わせて竹箴自体の大きさを変えることよりも、箴をおさめる框（かまち）を改造することで使用できる箴の大きさに幅を持たせることができることなど、試作品を完成させるに至るなかで、現場で知恵が紡がれている。こうして、復活の過程において、新たに作られた竹箴が使われるための準備が着々と進んでいるのだ。

そこで改めて、単に復活させただけでは竹箴を使い手に届けることはできないことに着目したい。試作品の完成を導くという意味での竹箴が復活を導くことができたならば、竹箴研究会には、使い手に竹箴を届けることができるための仕組み作りが必要となる。これを竹箴研究会で用いられているスローガンをを用いて表現するならば、復活から「復興」へのダイナミックスをもたらすことが、竹箴には求められているのだ。

3.3 道具の復権を通じた産業システム全体の復興を求めて

前項では、竹箴には復活から復興へのダイナミックスが求められていることに着目してきた。これは、竹箴の復活とは、生産環境を復元

するに止まるものではなく、流通環境が復元されることが要請されていることを意味している。一度は生産環境が減じた竹箴ではあるが、使用者が抱く使い心地の良さによって、使用環境までもが減びることはなかったのである。そのために竹箴は使用者の側から再び市場で流通することが求められたのだ。このような動きが見られたことから、竹箴という道具が、人間の行動する規範をも左右させたと捉えることができる¹⁹。

そこで、竹箴が生産環境ならびに流通環境に及ぼすべき性質を、竹箴の持ち得る手織り産業への権利として捉えることにしよう。そもそも、竹箴は職人の手仕事によって作られた使い心地の良さが追い求められた道具であった。そのため、手織りという道具を身体の延長として使うことで作品を作り出す分野において、使い心地の良さがその作品自体にも影響を及ぼすこととなる。その際、道具は使用者に対し、一定の作業を安定的に行うことができるか、また安定した生産環境の中で持続性のある産業として従事していくかどうかを左右することになる。このことから、使い心地の良い道具は、人間から適切に使われる権利を持っているのだ。このように、人間から適切に使われる権利を持つ道具は、いつまでも適切に使われ続けられるだろう。そして、このような権利を道具が有するとき、その道具は適切に使われ続けることによって朽ち果てる義務を負うこととなる²⁰。

第1章にて道具が身体の延長として位置づけられることを確認する際に引用した森（2007）には、続きのことばがあった。「対して機械は、生み出される代物や機械に主体があって、関わる人間には代替が可能な適応能力を求め、複製品の大量産出を指向して限りなく改良される運命にある」というものだ（森, 2007, 17ページ）。興味深いのは、どちらも使い手は人間であることは変わらないにも関わらず、道具と機械を比較させていることにある。よって、機械はスイッチを入れれば人間の都合など構わず淡々と決め

¹⁹ 注7でも触れたとおり、集団に対する規範の生成、維持、変容、消滅を扱った理論として、大澤（1990）による社会学的身体論がある。その中では、規範の生成、維持、変容、消滅は、無生物であってももたらすことができるとする論考がなされている。そして、規範の作用圏に及ぶものを身体、及ばないものを事物と呼んでいる。本稿では、竹箴を身体の延長として捉えているため、この社会学的身体論を援用し、竹箴と竹箴の使い手との間に見られる規範について取り上げて、生産環境や流通環境の有り様について論考することも可能と思われる。しかし、本稿では、先にも示したとおり、社会学的身体論には立ち入らず、道具が生産環境全般に対して影響を及ぼしたことのみに確認するに止める。

²⁰ この点は、塩野（2008）に次の論考があることから、論を待たないだろう。「道具というものは、一番愛用されたものから姿を消していく。使い勝手のいい物ほど使われるから姿が残らない（p.292）」

られた作業をこなすだけだが、道具はあくまで人間の意思を尊重することができるものである、という特性を指摘することができる。

このように機械と道具との比較から捉えてみれば、竹箴もまた、使用者に明確な意思が求められ、使用の際に意思が尊重される道具に位置づけられることがわかる。竹箴は、はた織り機の一部品に当る。そして、はた織り機という道具は、まさに身体の延長として利用することで布を織り上げる。そんなはた織りという行為の中で、箴はタテ方向に張られた糸（経糸）に横方向の糸（緯糸）を通していく過程の中で使用される。この時、経糸に緯糸を通しただけでは隙間が空いてしまうため、緯糸の目を詰める作業が必要になる。そこで、その作業に使用する道具が箴なのだ。また織り手が箴を使用することで、織り上げる布の幅を均一に保つこともできることも見逃せない点である。

加えて、第一筆者は実際にはた織りの産地である奄美大島で織りを習うことで、はた織りという行為は、はた織り機（高機）を身体の延長として使用することを、身をもって体感している。杼という緯糸を納める道具を手にした時のチャッという音から始まり、経糸に緯糸を通した時には杼がジャララッという音を立てて走った後、箴がパタンと打たれる。すかさず足元のペダルを踏み替えることで、^{ソウゴウ}縦糸を吊っている部分をパツと音を立てて上下させる。これらの一連の工程を延々繰り返すことで、布が織り上がっていくのだ。身体はこの行為の流れを覚えているため、作業は無心の中での作業となる。まるで写経や座禅をすることで精神統一をしたり安らぎを覚える人の気持ちと重なるのではないかと感じた程なのだ。ただし、無心になる快感を得るためには、一連のチャッ、ジャララッ、パタン、パツという音がテンポ良く、そして小気味良い音で鳴らされることが必要とされることを記しておかねばならない。

そもそも使い心地の良い道具は、使い手に求められるものであった。しかし、現代における大量生産－大量消費の時代においては、その求められる価値観が価格に特化されてしまい、使い心地の良さという観点はないがしろにされてきた。そのことは、第1章で引用した「手仕事の時代は終わったのだ」（塩野、2008）という表現が象徴している。しかし、手織産業において

は、その使い心地の良さから、竹箴の生産環境の復活と流通環境の復興が望まれた。そして、制作団体が現れ、後継者や流通の整備がはかられている。作り手と使い手のこのような状況が維持、発展されていけば、使い心地の良い道具の在り方が産業界全般の環境に変化をもたらす、産業としての活性化を導くものとなりうるだろう。つまり、使い手自身が使い心地の良い道具を使いたいと願い、また自身で行える範囲であっても、その道具が制作され続ける環境を整備させる取り組みが着手、展開されるということである。第一筆者がそうであったように、ブログで取り上げるだけでも道具の価値は発信される。しかし、その衝動は道具から引き起こされている。一旦は生産環境が消滅したとしても、その使用環境さえ残っているあいだは、遺された道具によって、再びその道具が生産され始める環境と生産され続ける環境が整えられると考えられる。

以上のように、使い心地の良い道具には、根源的に生産を求める役割が埋め込まれている。と同時に、徹底的に使用される宿命を背負うこととなる。とりわけ、竹箴に起こっている一連の動きは、道具自体の権利が再び得られるという意味において、道具の復権がもたされた事例である。ゆえに、制作者や使用者に対して、再び制作や使用の意義を問いかけていることこそ、道具の復権がもたらした効果ではなからうか。

4. 結論・課題・展望

4.1 道具の復権から産業の復興へのダイナミックス

本稿は、手織り産業において竹箴が、織り手の身体を延長するものとして位置づけられるとの観点から、身体化された道具の復権こそが、産業の維持・発展、転じて復興を導くのではないかと、という点に接近してきた。道具の復権とは、第3章で述べたように、生産の道具の側から、その道具を用いて生産されるもの、またその流通、さらにはその使用の全般の状況が適正化されることを言った。つまり、道具ならびに道具によって生産されるものが人々に求められ、道具ならびにその生産物も生産され続けて

いるという状態が導かれたとき、道具が復権したと捉えることとした。

本研究は、竹箴という一度減んだが再びその生産が求められている道具をみつめることを手がかりにしたフィールドワークである。改めて本稿の構成を振り返ってみれば、第1章では研究の概要を示し、第2章では研究対象が置かれた状況を整理した上で、第一筆者自身の奄美大島における滞在型フィールドワークからの知見をエスノグラフィーに整理した。そして、第3章では竹箴を復活から復興へと導くための視点を身体性という観点から明らかにした。

鳥居(2008)に示したとおり、竹箴は一旦減じた道具ではあるが、竹箴が再び市場に出ることを求める人たちによって竹箴研究会が組織された。そこでは求める人が当事者となって元職人に教わり、技術保存に取り組んでいるいわば、素人集団による復活への挑戦である。しかし、この5年にかけて、行政から援助を受けることで復活への取り組みを確かなものとし、本当に使える竹箴の復活と、竹箴が本当に使われる手織りの復興を目指しているのだ。

しかし、竹箴は、竹箴研究会の立ち上がりから5年経った現在でさえ、まだ復活にすら至っていない。本当に使える竹箴を織り手の元に届けるためには、作り手自身の判断では決められないからである。そのためには、まずは織り手の選択肢の一つに竹箴が位置づけられるべく、早急に竹箴の完成品が生まれ、その生産販売の体制を整えることが求められる。そうすれば、自ずと使い手に竹箴が届く物理的な仕組みが整備されるためだ。

こうして、竹箴の生産と販売の環境を整えば、耐久性が低く、値段も相対的に高価な竹箴をあえて用いるという、選択眼を持つ織り手が生まれてくるだろう。その際、その織り手は、単に道具に対して優れた選択眼を有しているだけではなく、衰退しつつあるとされる手織り産業の担い手として真摯に向き合っていく姿勢を有する人として受け止められうる存在である。この一連の動きは、竹箴が一度減びながらも、使い手の竹箴を欲する声によって再び制作が行われた性格を持つからこそ、判明した。このような竹箴の制作環境への観点は、製品の復活から産業の復興へ、そして産業の復興こそ道具の復権から、という視点を得ることによって確かなも

のとなった。

4.2 新たな手仕事の時代への光明

本研究では、道具の復権とは、人々に求められ、生産され続けているという権利が正統に守られている状態であるとした。残念ながら、研究対象である竹箴は、未だこの権利は手に入れていない。

復活すら遂げることができていない竹箴であるが、それでも使い手から寄せられる期待の声は心強い。焦りが勝って、未完成なものを使い手に完成品として届けてしまったら、今までの努力は台無しになってしまう。どうか、完成品が出来上がるまで辛抱強く待っていただきたい。

竹箴研究会は、2008年で6年目を迎える。元職人に指導していただいても、市場に竹箴が出回らない時間が延びるばかりでは実にもどかしい。しかし、この状況は、一度道具の生産が停止し、再度復活させようとした時に、どれほど時間と労力がかかることであるかを示している。この世に未だ息づく優れた道具が、その生産を停止する事態を迎えないことを願うばかりだ。

そんな中、本稿でも示した通り、竹箴研究会では、竹箴は将来的には販売が行えることを確実に目指している。現時点では補助金が充当されての運営をやむなくしているものの、補助金が無くとも運営できることが理想であるという。そのためには流通、生産といった販売網の整備はもちろんのこと、職人の継続的な確保と育成をどのように行っていくかなど、会が抱える課題は山積みである。

そのような中でも希望はある。なぜなら、少なくとも第一筆者自身が、修士論文の執筆を終えた後も、引き続き奄美大島に住まい、はた織りの技術修得に励む覚悟を決めたためである。このことにより、未来の手織り産業を担う一人の織り手として、現場をみつめ、現場の要望が竹箴研究会に報告されていく環境が得られたのだ。

さらに、岐阜県で行われる研修には参加できない第一筆者は、大島紬の現場での竹箴の状況を伝え、ウェブサイトの整備を担っていく決意も、会のメンバーに伝えられている。ウェブサ

イトも改訂の余地は枚挙にいとまがないところではあるものの、少なくとも竹箴の販売も視野に入れた内容作りに思索を巡らせ、改訂方針を考えていくことも遠くない未来にやってくるだろう。

冒頭に述べた天然木のハンドルの再製作は、場合によっては単なる哀愁の世界、さらには所有欲の高く、さらには経済的に余裕のある、熱心な蒐集家の世界、そういった話に片付けられてしまうかもしれない。事実、既に多くの自動車のハンドルは、安全対策のためにエアバッグが組み込まれ、利便性のために映像や音声を操作するために機種に依存したボタンが埋め込まれるなど、天然素材のものはもとより、既に車外品に交換することすら想定外となっているものもある。このように捉えてみれば、最新の時代の文化が反映したものをあえて購入せず、徹底した愛着から道具を求める人々の行為には、結果として職人たちが深く関与することによって生じる重層的な物語を楽しんでいるのではないか、という観点も指摘できる。世界的な不況の中、まさにハンドル一つをとって、自動車産業の舵取りを考えてみるのも、社会を変革する上での着想としては一興とは言えないか。

少なくとも竹箴は、竹箴研究会というフィールドでの第一筆者の小さな挫折から、奄美大島という新たなフィールドでの実践を経て、まずは道具の復活から復興への道が開かれつつある。それでも、竹箴の復興を通じて手織り産業の復興に光明が見いだされた、などと楽観的なことを述べるつもりはない。ただし、竹箴研究会という素人集団によって挑戦された伝統技術の継承が、織り手に竹箴の良さを再考するきっかけをもたらしたこと、すなわち道具が復権され、それを通じて産業全体の復興の道筋を確認できたことは事実である。こうして制作に伝統技術を要する竹箴が、再び織り手の手に入るようになるという事態は、ものづくりにかける人々に勇気と希望を与えることとなるだろう。

確かに塩野（2008）の言うように、「手仕事の時代は終わった」かもしれない。しかし、「新たな手仕事の時代」が確実に到来した。そう確信を抱き、稿を閉じることにしよう²¹。

引用文献

- 青木保・内堀基光（編）『岩波講座文化人類学 「もの」の人間世界』岩波書店、1997年
- 出川直樹『人間復興の工芸』平凡社、1997年
- 伝統染織技術グループ「竹箴の製織特性に関する研究—箴材質が織物の風合いに与える影響について—」（京都府産業技術研究所 繊維技術センター『平成18年度 研究業務報告書』）2006年、80-81ページ。
- 穂積町『穂積町史 通史編 下巻（近・現代）』太洋社、1979年
- 金原達夫『大島紬織物業の研究』多賀出版、1985年
- 森孝之「道具の中の道具」道具学叢書委員会『道具学叢書001 道具学への招待』ラトルズ、2007年、16-17ページ。
- 名瀬市『名瀬市誌』下巻、1973年
- 野村雅一『身ぶりとしぐさの人類学 身体がしめす社会の記憶』中公新書、1996年
- 大澤真幸『身体の比較社会学』勁草書房、1990年
- 長田須磨『奄美女性史』農村漁村文化協会、1978年
- 重村斗志乃利『大島紬誕生秘史』南方新社、2007年
- 茂野幽孝『奄美染織史』奄美文化研究所、1973年
- 下村輝「つむぎ#207」『月刊染織 a』染織と生活社、第256号、2002年、12ページ。
- 志村ふくみ『色を奏でる』ちくま文庫、1998年
- 塩野米松『失われた手仕事の思想』中公文庫、2008年
- 杉万俊夫（編）『コミュニティのグループ・ダイナミックス』京都大学学術出版会、2006年
- 田口理恵「最後の竹箴産地 岐阜・祖父江の竹箴」『月刊染織 a』染織と生活社、第273号、2003年、37-39ページ。
- 鳥居史絵「道具を通じた伝統産業の保護に関する一考察—日本竹箴技術保存研究会の現場を通して—」『同志社政策科学研究』（同志社大学総合政策学会）第10巻第1号、2008年、197-210ページ。
- 鳥居史絵「日本竹箴技術保存研究会の活動を通じた道具の復権に関する研究—技術保存から環境保全へのダイナミックスを求めて—」同志社大学大学院総合政策科学研究科修士論文、2009年、未公開。
- 山口洋典「ソーシャル・イノベーションの研究におけるフィールドワークの視座—グループ・ダイナミックスの観点から—」『同志社政策科学研究』（同志社大学総合政策学会）第9巻第1号、2007年、1-21ページ。
- 京都新聞 2008年5月12日：「専ら道具の材料、職人絶やすな 京都市が伝統工芸で対策本腰」<http://kyoto-np.jp/article.php?mid=P2008051200093&genre=A2&area=K00>（閲覧日：2009年1月8日）

²¹ 末筆ではあるが、本論稿の執筆にあたり、筆者らを受け入れてくださった、竹箴研究会ならびに大島紬産地、またものづくりに励む全ての人々に敬意と謝意を表させていただきたい。